

# スタンダード研究会会報 (1994) No. 4

1994.3.30

第10回 スタンダード研究会 於 玉川大学 1993.6.11

## スタンダードにおける暴力行為 (発表要旨)

鎌田 博夫

スタンダードは幼い頃から自分が「残酷で残忍な性格」だと家族から思われていたという思い出にとりつかれている。一方、小説作品では、大抵の主要人物がそれぞれのやり方で直情径行に走りたがり、暴力を振るおうとしたり、振るったりする。この行為は義憤や自尊心の表現手段となっている。たとえばよく現れる決闘はそのもっとも顕著な表れであろう。この暴力への志向は一種のエネルギーの表現として考えられようが、ここではむしろ小説における暴力志向の日常性とスタンダード自身の思い出との関連において検討したい。

スタンダードは「アンリ・ブリュテールの生涯」で、自分の幼年時代を台無しにし、不幸なものにした原因として父の教育方針を挙げ、「おなじ年頃の子供らに話しかけることすら絶対に許してもらえなかった」と言う。このみじめな思い出とともに、生涯、ついに和解し得なかった父とグルノーブルに対する嫌悪あるいは憎悪がスタンダードのロマネスクな想像力に決定的な作用を及ぼしているように思われる。

「赤と黒」における家庭的に恵まれなかったジュリアンに比べると、「バルムの僧院」のファブリスは、その作者にとってはこの上もなく自然で幸せな幼年期を送っている。つまり幼きスタンダードが夢見たような子供にあそびの生活である。「村の小さい子供たちと、さかんに殴ったり殴られたりした」とか、「大冒険をしたものだ」というような簡潔ではあるが特徴的な語りの中に、作者は自分の不幸な思い出から完全に解放され、自由な空想に生きていることができた。いやむしろ父やグルノーブルへの嫌悪のかわりに楽しいグリアンタと自由な遊びを置き換えたとも言えよう。こうして思い出とフィクションとの間に完全なバランスが生まれる。

またスタンダード的人物は、慎重なジュリアンをはじめ何不自由もない富裕なオクターヴやリュシアン・ルーヴェン、さらに空職の道をゆくファブリスも喧嘩や乱暴、凶暴な衝動、格闘、殺人未遂など、本能的に暴力行為へ走りようとする。このような性格を「決闘好き」と言ってもよい。ところで、はじめに指摘したように「アンリ・ブリュテール」でスタンダードは自分が「残忍な性格の持ち主」だと決めつけられていたことが忘れられず、さらに家族に反抗して、家族の態度とは逆に革命っ子となり、ルイ16世の処刑を歓迎する。仲間と決闘しそこなったときの口惜しさは幾年間も忘れられない。これらの思い出はばらばらであり、父に対する反感として割り切ることはむづかしいが、少なくとも小説における暴力志向の日常性と関係づけられよう。つまりスタンダードの場合、反抗は暴力志向でもある。

要するに、「赤と黒」や「バルムの僧院」では、不幸な父子関係と暴力志向の日常性と

が小説の基本的構造を構成するとともに、その構造のもっとも調和ある完成域がファブリスの場合ではなからうか。

## スタンダールにおける言語認識と「感覚の透明性」〔発表要旨〕

河野 英二

### 〔I〕初めに 〈問題の所在〉

スタンダールの文学作品を特徴付けている幾つかの要素の一つに、いわば「感覚の透明性」とでもいうべき特色がある。つまり、作品の重要な場面の殆どで繰り返し用いられる "rougir"、"pâlir"、"singulier"、"tremblant" 等の幾つかの語を通して、主人公たちがその瞬間に抱いている「感覚」（ここでは「感情」や「感動」をも含んで、その登場人物が感じている気持ちの総体の意で用いる）が、直截的に他者に（そして我々読者に）はっきり見える形で表現されるという特色である。では、その特色がどのような意味を持っているのか、またその「感覚の透明性」の背景には何が考えられるのか、さらにはそれらを通して現代に生きる我々に提示されているものは何かということについて、河野が今までにそれらに関連して発表した三編の論文<sup>(1)</sup>に基づき、以下に述べてみたい。

### 〔II〕"ROUGIR" "PALIR" の意味するもの：「感覚の透明性」とその役割 〈論文1に基づいて〉

「スタンダールにおける類出語 "ROUGIR" "PALIR" の意味するもの」とは、何よりもまず、その語を担う作中人物の「感覚」が、透明に外部に顯示されることである（感覚の透明性<sup>(2)</sup>）。そしてその「感覚の透明性」によって、その作中人物とそれを目にする他の作中人物（ひいては我々読者）との、言語による以上の「交流」もしくは「記号の交換」が可能となるのである（交流または記号の交換<sup>(3)</sup>）。（またこの時、「見る」ことが「知る」こととなり、同時に「愛する」こととなるのであり、そこにはまさに、"Connnaissance" と "Tendresse" との究極的一致（J.-P. リシャール）という形での、スタンダールにおける「完全な幸福」（J. スタロビンスキー）の一典型を見ることができよう<sup>(4)</sup>。）さらにまたこれらの語は、それが重要な場面ごとに頻りに「繰り返される」というまさにその特質により、一つの作品の中での、さらにはスタンダールの作品群の間での、スタンダールの世界の一貫性もしくは統一性を保持する役割を担っているものである（統一性<sup>(5)</sup>）。

### 〔III〕スタンダールの言語認識："singulier" の類用の意味するもの 〈論文2に基づいて〉

そのような「感覚の透明性」の背後にあるものを知るうえで、これまた「感覚の透明性」を担う語の一つでもある "singulier" の類用について考えてみることは、一つの有力な手掛かりを与えてくれよう。初期の習作 *Filosofia Nova* に既に明らかなように、スタンダールは早くから、強い情熱や感動を蓄にした時の言語活動の不可能性を自覚していたのであり、それだからこそ、誇張を排し、「この上なく簡潔な文体」（同書）を求めたのである（言葉の無力化<sup>(6)</sup>）。そのような態度を意図的に選び取ったスタンダールにとって、"singulier" という語は、ただ単に「奇妙な」という意味を表すだけではなく、当時のフランスにおいては不可能となっていた（と彼が考える）真の情熱の「他のものとは少しも似ていない」「驚くべき」姿を表現する、いわば「情熱=魂の力とその偉大さの記号」としての価値・役割を担うことが出来たのである（情熱の言葉<sup>(7)</sup>）。そして、この語もまた、

彼の諸作品に共通して見出される「スタンダールの抒情の世界」(A. カラッチョ)を漂う、いわば「スタンダールの大気」とでも言うべきものを形成する一要素となっているのである<sup>(6)</sup>。

〔IV〕スタンダールの言語認識と「感覚の透明性」(論文3及び上記二論文に基づいて)

スタンダールにおける「感覚の透明性」を担う類出語としては、“rougir”、“pâlir”、“singulier”の他にも、“transporté”、“tremblant”、“convulsif”、“s'évanouir”や、また“s'attendrir”、“folie”、“avec enthousiasme”そして“larme”等が挙げられよう<sup>(7)</sup>。そして、これらの語によって担われる「感覚の透明性」の意味するものを、Ⅲを踏まえて改めてまとめ直すならば、次のようになるであろう。即ち、〔1〕言語表現に代わり、その限界を補い、さらには言語表現がなし得る以上の表現効果を生み出すという役割(言語表現の代替<sup>(10)</sup>)、〔2〕「感覚」という人の内部にあって本来目に見えないものを、その人の外部に「はっきりと、あらわし示す」性質(顕示性<sup>(11)</sup>)、〔3〕そうした「感覚」を担う者と、外に現れたその「感覚」を見る(ないし感じる)者との間に生じる心の通い合い、即ち心の「交流」(交流<sup>(12)</sup>)、〔4〕「感覚の透明性」を担う語の繰り返しのよって、作品の最初から最後まで主人公たちの、さらには作品全体の、統一性もしくは一貫性を保証し、支えるとともに、スタンダールの文学作品群を貫く、まさに「スタンダールの世界」全体の統一性を支える要素の一つとしての役割(統一性<sup>(13)</sup>)、ということに。そして、これらの背後にあるものは何かというと、やはり、「強い情熱や感動を前にした時の言語活動の不可能性を自覚していた」スタンダールの言語認識ではなからうか。

〔V〕結論:「感受性」の表現としての「感覚の透明性」<sup>(14)</sup>

それでは、そうした言語認識のもとで、スタンダールの作品が、通常の言語では表現し切れない感動もしくは「情熱=魂」の真の姿とその偉大さを表現するという意味を持つ「感覚の透明性」を獲得したとして、一体何が彼をそのような作品創造へと向かわせたのであろうか。——それは、そのような主人公たちによって体现されたスタンダールその人の「感受性」ではあるまいか。即ち、功利打算のために自己の「感覚」を隠すことのみで長け、その結果人生における「感動」など殆ど失ってしまったに等しい(当時のフランス人を含む)姑息な近代人に対して、スタンダールは、人間が本来持っている「感動できる方」としての「感受性」を強烈に、かつ十全にその作品の中に描き出すことにより、人間の魂の真の偉大さと素晴らしいさを主張したのだとは言えまいか。言い換えれば、スタンダールは常に我々に対して、そのような「感受性」を担い得るかという問いかけを鋭く突きつけているのではなからうか。そして、まさにこの点にこそ、あの有名な“TO THE HAPPY FEW”という言葉の中に潜む真の厳しさが見出されよう。

(丁)

(これは、1993年6月12日に三川大学で開催されたスタンダール研究会第10回研究会において、河野が三編の抜粋りを資料として配付したうえで行った発表の要旨である。)

【注】(1) 河野英二「スタンダールにおける類出語“ROUGIR”“PÂLIR”の意味するもの——副題・感覚の透明性——」(1984年11月、日本文体論協会(後に「日本文体論学会」と改称)発行「文体論研究」第31号、70頁～89頁)、以下、論文1とす。/同「スタンダールの文体上の一特色——“singulier”を以て——」(1990年1月、国士舘大学教養部発行「国士舘大学教養論集」第30号、71頁～85頁)。以下、論文2とす。/同「スタンダールにおける感覚の透明性——「感受性」とその表現を巡って——」(1991年1月、国士舘大学外国語外国文化研究会発行「外国語外国文化研究」創刊号、53頁～76頁)。以下、論文3とす。

